

国際耕種と私・財津吉壽<その1>

国際耕種との出会い

2016年6月に国際耕種(AAI)を退社した。それまで27年間、AAIの中で楽しい仲間と、AAIの行う農業分野での国際貢献の一翼を担って活動してきたと思っている。現在、地元宮崎で地域貢献に寄与すべく活動を行っているが、退社を契機にこれまでのAAI活動を数回に分けて整理してみようと考えた。

私の国際耕種との出会いは1978年、現社長・大沼洋康とのUAEでの出会いが切っ掛けとなる。大学卒業後、静岡大学の恩師・故松田敬一郎博士の紹介で、アブダビ-アルアイン間の沙漠の中に設立されていた沙漠開発協会(旧通商産業省所管)が運営するアブダビ試験農場に土壌分析助手として派遣され、そのとき現地で専門家として働いていたのが大沼であった。海外初めて、英語も全くダメな私を、大沼は現場活動を通して教育した。農場で働いていたパキスタン人労働者やパレスチナ人技術職員と楽しく作業をともにしながら、一方で圃場試験に妥協を許さず、常に最善を尽くそうとする大沼を見ながら、私もその姿勢に引き込まれながら日常業務を行うことができた。そのような現地の中で、海外で農業支援を行う国際開発コンサルタントの仕事があることを初めて知り、これをきっかけに私の将来の職業分野が定まった。

帰国後、大学に戻り、修了とともに国際開発コンサルタントでの仕事を探していたところ、中央開発(株)で引き受けてもらうことができた。私は仕事の面では常に恵まれていた。新米の私に海外業務は途切れなく入ってきた。有能な先輩から各種分野の知識・経験を学ぶことができた。また学会・研修などへの参加もほとんど意のままにさせてもらった。専門としていた土壌・土地利用分野ばかりでなく、作物、灌漑、農家経済、衛星画像解析など農業全般にわたって得た知識・実務は、私の農業分野のコンサルタント業務実施に大きく貢献した。さて、このように専門業務では満足していた私であったが、将来的にはアブダビでの経験にあったような長期滞在型の農業開発業務を希望しており、その考えは次第に強くなっていった。しかし、当時は私の専門分野で長期派遣の機会を見つけることは、中央開発ではできなかった。

そのようなときに、大沼がドバイより帰国して休眠状態のAAIでの活動を再開すべく、参加を要請された。結婚したばかりの私にとって大きな「かけ」になる割には、かなりあっさりとAAIへの転職を決めた。が、転職までには2年ほどかかったように記憶している。それはAAIと中央開発の駆け引きである。私はAAIへの移籍を希望していたが、規模拡大を進めていた中央開発はAAIの取り込みを図った。このような紆余曲折があったが、大沼と二人でAAIの活動を始めた。それが1989年である。

協力会社である(株)国際水産技術開発の机をひとつ借り上げ、二人で共有していたが、あまりの非効率であったため、早々に横浜・平沼商店街で事務所を借り上げ、活動を本格化させようとした。会社の体裁をなしていなかったAAIには、事務所に長机一つあるのみで、入社後最初の仕事は自分の入社事務手続き、AAIの年金加入作業、関係会社への活動開始の礼状発送であった。

しかし、会社開始時期の諸雑務を行うことは、楽しく「我が社」を動かしているのだという自覚を強く持てる時期であった。すべてを二人で決定し実行できる。その責務はすべて自分で取る。このような経験が、その後の「AAIを動かしている」という自意識をもてたと考える。乾燥地農業を専門とするAAIの出だしは、大変ではあったが比較的容易に動き出した。それは、中央開発や大沼の人脈によるもので、その多くは現在も確固としたAAIサポーターである。

(つづく)



試験場での収穫物調査